モダニズム建築

□Villa Savoye(仏)
1928
Le Corbusier(仏)
1887~1965

□Falling Water(米)
1935
Flank Lloyd Wright(仏)
1867~1959

□BAUHAUS(独)
1919
Walter Adolph Georg Gropius(独)
18831969

モダニズム建築の死

□プルーイット・アイゴー団地の爆破
1972
人間主義の建築だったはずのモダニズム建築はいつしかコストを重要視するように。生活の器として不十分となったこの建築は住民の手で爆破された。

この事件を皮切りにモダニズム批判が始まる

ポストモダニズム　1970’s～1980’s

□Vanna Venturi House (米)
1963
Robert Venturi(米)
1925~
通称「母の家」。不自然に曲がった階段、少し大きなスケールのダイニングなど、多様性を持たせた住宅。

□AT & T Building(米)
1984
Philip Johnson(独)
1906~2005
ポストモダニズム建築の例としてしばしば登場する建築。装飾的な頂部のペディメントが特徴。

Robert Venturi

□Robert Venturi(米)
1925~
ポストモダニズム提唱者。
1991 プリツカー賞受賞。

建築の多様性と対立性

□多様性

設計をしていく上での矛盾を排除していくモダニズムへの批判をこめて一義的には決めきらない､「白」と「黒」の二項対立ではない（グレーゾーン）設計を目指す。
含みを持たせる。簡単に言うと｢いろいろあるのがいい｣というスタンス。

□対立性

「白」か「黒」のどちらかではなく、どちらもありうるというスタンス。
複数のものが存在することによって緊張が生まれ、設計はより濃密なものになる。

□Less is bore

単純性（simplicity）がうまく作用しないと、ただ単純さ（simpleness）が残るだけである。あからさまな単純化は味気ない建築を意味する。
ミースの言葉の拡大解釈によるいきすぎた「単純化」を行う追従者たちに対し批判した。

ヴェンチューリのいう「多様性」とは表層的な建築の形態についてのものではなく､建築の「内」に存在する「内的多様性」である。建築を「部分」に「解体」し､「統合」する。この過程を経ることによって「全体性」のうちに「多様性」が成立するのである。「部分」だけではそれ以上の意味はなく、それが「全体性」を持つがゆえに「コンテクスト」との関係において、多様な「意味」が発生するのだ。
ヴェンチューリは、世の中が「多様化」する時代において、世界はそもそも「多様」であるという前提に立ち、「対立」する要素を「単純化」するのではなく、それらを「抱合」し、多様な「意味」を持たせ「精神の満足する」多様（豊か）な建築を得ることを試みたのである。

ラスベガス

□Duck

機能そのものを形にしたもの。機能主義に走るモダニズム建築を嘲笑した例え。

□Decorated Shed

高尚なモダニズム建築に対し、大衆的な看板建築に視点を移すことを提唱。

・あひる／ the duck：それ自体が象徴である特別な建物

・装飾された小屋／ the decorated shed：象徴で装飾された普通の建物

前者は近代建築の成れの果てであり、後者は著者がラスベガスで見い出した平凡な建築のあり方であり、著者は後者の大衆的な建築のあり方に着目した。それらの対比は実際の作品、クロフォード・メナー (ポール・ルドルフ／ 1966) とギルド・ハウス (ヴェンチューリ＆ローチ／ 1963) を通じて行われるが、前者が機能主義を唱いながら複雑に分節化しているのに対し、後者が構造と装飾を切り離すことで至ってシンプルな形態におさまっているという、ねじれた逆転関係をもつ。

モダニズム建築	Venturi
堂々として独創的、革命的	醜くて平凡、非革命的
象徴主義の黙殺・否認＜空間至上主義＞	象徴主義の自覚・肯定・積極的利用
含蓄の連鎖作用（暗示的）	明白な連想作用（明示的）
あひる（DUCK）	装飾された小屋（DECORATED SHED）
アメリカの工業ヴァナキュラー（初期） ＋初期モダニズム建築（60 年代当時）	アメリカの商業ヴァナキュラー
空間全体が象徴性を持った建物、建築＝彫刻	象徴性を構造から分離した建物 建築＝装飾＋シェルター（普通の建物）
メガストラクチャー（巨大構造）	都市スプロール
高尚芸術	大衆主義
作り手目線	使い手主義
理想主義	現実主義・実用主義
（建前上）機能主義、幾何学を根拠に設計	文献を根拠に設計
普遍的、インターナショナル	土着的（ヴァナキュラー）、地域主義

Colin rowe

□Colin rowe(英)
1920~1999
20 世紀後半に活躍した建築史家。
建築家（都市計画）。

マニエリスムと近代建築

□理想的ヴィラの数学

パラーディオのマルコンテンタ（写真左：1550~1560）とコルビュジェのガルシュ（写真右：1926~1928）の家に共通の比例があることを見出し、それまでの歴史的文脈から逸脱したものとされていたモダニズム建築を歴史の流れに乗せた。

□マニエリスムと近代建築

美術史上マニエリスムが様式として確立されたのは 1920 年代とされ、1520～1600 年がマニエリスム期とされる。ルネサンス期の抽象作用は、理想的な形態世界への参照であり、芸術家が客観的真実と信ずるものを主張し、宇宙の科学作用と考えるものを表象する。一方現代芸術における抽象作用は、個人の感覚世界への参照であり、結果的に芸術家の私的な作用のみを表彰する。
今日の建築は、その空間の配列によってマニエリスムと比較できる。スケールの異なるエレメントの直接併置や、不協和なもの同士が完全な一体化を主張する、など。

□透明性 - 虚と実

写真左：虚→知覚的な透明性
先の空間を想起させるガラス
奥行きの浅い抽象的な空間に正面を向けて重ねて並べられた物体を分節化して表現しようとするときに生まれる。

写真右：実→物理的な透明性
ガラスが直接的な奥を見せる
奥行きのある自然主義的な空間の中に置かれた半透明の物体の持つ「騙し絵」効果と関連

コラージュシティ

コラージュ・シティとはコラージュを用いて描かれた理想都市のこと。著者は 20 世紀の都市デザインを支配してきた理想都市を「ユートピアへの未来派的ファンタジー」と「伝統的な都市へのノスタルジア」の 2 つに分類する。本書の中で著者が追求している都市の理想は、この 2 つの概念がうまく調和したもの、つまり「予言される場」と同時に「記憶の劇場」ともなる都市である。
近代建築は「精神」の自由を獲得する戦いであったがゆえに、個体としての孤立、共同的な都市組織の崩壊を招いた。それに対して、伝統的な建築―都市組織は「抑圧」にかかわらず価値・出来事の多様性を許容している。そんな近代主義（理念的実証）と古典主義（慣習的実践）を架構することが、二〇世紀後半の建築―都市の苦境に対する処方箋として、著者はこのような方向性のもとに、建築や都市の歴史的事例をゲシュタルト（図―地の関係）によって比較している。

□ブリコラージュ

「寄せ集めて自分で作る」「ものを自分で修繕する」こと。「器用仕事」とも訳される。元来はフランス語で、「繕う」「ごまかす」を意味するフランス語の動詞 "bricoler" に由来する。
ブリコラージュは､理論や設計図に基づいて物を作る「エンジニアリング」とは対照的なもので、その場で手に入るものを寄せ集め、それらを部品として何が作れるか試行錯誤しながら、最終的に新しい物を作ることである。

(仏) フランス
(米) アメリカ
(独) ドイツ
(英) イギリス

□参考文献
i) ロバート・ヴェンチューリ (1978)『ラスベガス』　石井 和紘 , 伊藤 公文 (訳) 鹿島出版会
ii) ロバート・ヴェンチューリ (1982)『建築の多様性と対立性』 伊藤 公文 (訳) 鹿島出版会
iii) コーリン・ロウ (1981)『マニエリスムと近代建築』 伊東 豊雄 , 松永 安光 (訳) 彰国社
iv) コーリン・ロウ (1992)『コラージュシティ』 渡辺 真理 (訳) 鹿島出版会

□web 参考
「10+1 DATABASE「最後の啓蒙」「啓蒙の最後」――コーリン・ロウ『コラージュ・シティ』をめぐって | 丸山洋志」 <http://db.10plus1.jp/backnumber/article/articleid/555/>
「ARCHILIVE」<http://wiki.livedoor.jp/archilive2008/>
「本で読む建築、ホンチク」<http://hontiku.blog129.fc2.com/blog-entry-25.html>